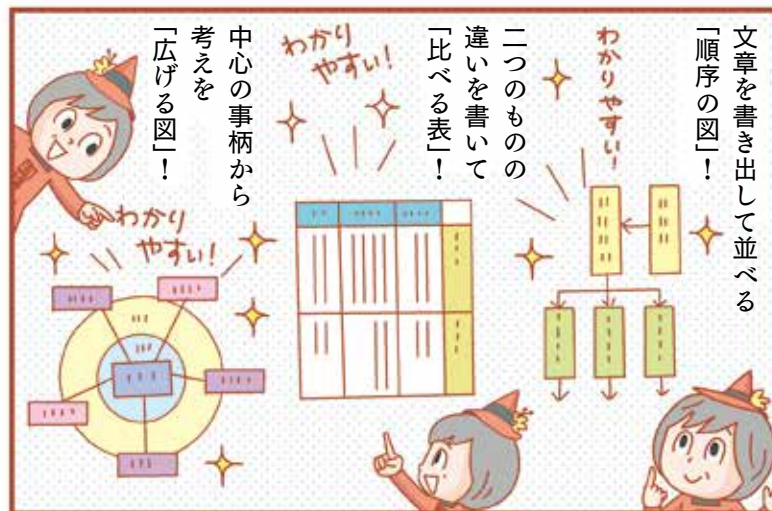


「思考ツール」を活用した 思考の可視化で、深い学びを

「一つの正解を導き出すのが困難な問い」が山積している今、「考えること」「感じること」「創り出すこと」の力を育成する重要性がこれまで以上に求められています。あふれる情報に溺れることなく、それらを整理し関係づけて自分の考えを構築していく資質・能力の育成は急務でしょう。「自分の目的に応じて必要な情報を収集、整理し再構築する力」をつけるためには、思考の可視化が不可欠です。心の中で思っていること、頭の中で考えていることを言葉にしてみる、それがどのように繋がっているのか、関係を目に見える形で図や表に整理する力を育成することが必要です。

現行学習指導要領（平成二十九年告示）には、【知識及び技能】（2）に「情報の扱い方に関する事項」が新設されました。内容そのものは、従来の国語科各領域の指導事項に重なるものがほとんどですが、ますます加速化する情報社会への対応を意識した重要な改訂内容であると考えます。

今回は、「思考ツール」を活用した「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくりについて考えてみたいと思います。



解説・監修／興水かおり

広島県生まれ。元玉川大学客員教授。23年の教員生活の後、港区教育委員会指導主事、東京都教育庁主任指導主事、小学校校長、玉川大学客員教授等を務める。光村図書小学校『国語』編集委員。

漫画／あべかよこ





わかりやすく筋道の通った表現をすることは、なかなか難しいものです。学習指導要領【知識及び技能】(2) 情報の扱い方に関する事項では、低学年に「共通・相違・事柄の順序」、中学年には「理由や事例」「全体と中心」、高学年で「原因と結果」といったキーワードが示され、指導のポイントになっています。

「順序」は、低学年から国語科の各領域で指導しますが、どんな順序で表現すれば相手によく伝わるか、時間の順序や事柄の順序に沿って並べ替えてみる試行錯誤が大切。そんなとき、二年生以上の巻末

折り込み付録「図を使って考えよう」の活用がおすすめです。上下巻それぞれに具体的な活用方法が示されています。もちろん、子どもたちにこのページを示し、いつでも使える便利なツールだという認識をもたせることも忘れずに。こうしたツールを思考整理に使う機会を意図的に作ることも大切です。

付録以外にも、ICT機器の活用、着脱可能な付箋やカードの使用など、子ども同士がお互いに言語化・可視化した内容を交流・共有して、自分の考えを見直すチャンスを提供し、「深い学び」を実感させましょう。



並べてみると順序が見える



「整理」の基本は、「分けること」です。机上整理したつもりでもいつの間にか元の状態に戻ってしまうという経験、皆さんにもありますよね。ましてや、子どもにとって情報整理、「分けること」のハードルは高いものです。まずは、入れ物(所定の場所)を指定し、そこに大まかに収納するところからスタートさせてみましょう。その際、入れ物に名前(見出し)を付けておくことが大切です。どこにも入らないものは「その他」として保留し、あとでゆつくり検討する。次に、目的を明確にして、必要な情報かどうか取捨選択していきます。目的が曖昧になら

ないように、見出しを付けること、必要に応じて情報のランク付け(色や記号など)をしておくことも重要なポイントです。インターネット等を使うと、大量の情報が集まります。大切なのは、何のために集めているのかという目的意識です。

伝えたいことをたくさん集めて、整理整頓。一定の順序で再構築して表現するという力は、他の教科の学習場面でも大いに活用できます。もちろん、日常生活でも(大人になっても!)

情報の山の中から、自分にとって必要な逸品を見つける力を育てましょう。

情報を整理しよう



「国語の妖精、コッシー」が解説！
「思考ツール」を活用した
思考の可視化で、深い学びを



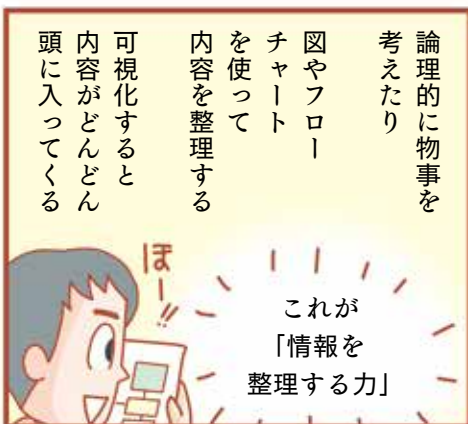
■情報の扱い方

	5月	6月	付録
	つながりをとらえよう	集めるときに使おう	図を使って考えよう
2年	じゅんじょ	メモをとるとき	じゅんじょ、同じところ、ちがうところ
	関係をとらえよう	集めて整理して伝えよう	図を使って考えよう
3年	全体と中心	引用するとき	分ける、くらべる、広げる
4年	考えと例	要約するとき	分ける、くらべる、広げる
5年	原因と結果	目的に応じて引用するとき	位置づける、分ける、比べる、広げる
6年	主張と事例	情報と情報をつなげて伝えるとき	つなげる、分ける、比べる、広げる、位置づける

「図を使って考えよう」は「読むこと」単元の「学習ページ」でも活用されています。六年生「やまなし」の場面の比較。四年生「アップとルーズ」での対比学習での図示化、五年生「想像力のスイッチを入れる」の「事例」と「筆者の意見」の分類など「情報の扱い」との関わりで考えてみるとすっきりします。教科書では、左の図のように、一学期教材として早めに出会うことで、その後の学びに生かしてほしいという願いがあります。後半の学習からも、それを既習事項として振り返られる工夫があれば、学びを支える資料にもなると思います。

急激な時代の変化に伴い、学校教育に求められる内容が多岐にわたり、いろいろなところでオ

バーフローが懸念されています。表面上の言葉に惑わされることなく、物事の本質を見極め、「国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力」を育成する国語科授業を創っていきましょう！



「情報の扱い方」の評価には気をつけたいものです。私たちは、とすると、きれいに見栄えよくまとまったものを高く評価しがちです。でも、子どもの思考が見えるノートやワークシートとは、どんなものでしょう。書き加えがあったり、訂正箇所が残っていたり、関連するところは線で結んであったり、比較したところには矢印が使われてあったり、表や図は、作品としてみるのではなく、子ども一人一人の思考の足跡、軌跡として評価してほしいと思います。また、そうした思考を促すためにも、表作りの場合は、項目作りの段階でしっかりと聞き取り

りをするなど、こまやかな指導が必要です。矢印の使い方や色の使い分けにルールを決めておくのも思考整理とその評価に有効です。子どもは、発達段階にもありますが、自分で書いたものでも、矢印の意味が不明になったり、目的が揺らいできたりしがちです。こまめに短いスパンで、一人一人の子どもに声かけ（ここがポイント）をがんばりましょう。子どもどうして参考になりそうなものは、貼り出すなどして相互評価を促すのも有効です。

評価の観点を明確に

